

## 編集後記

私ども明治大学大学院文学研究科では、2007年度段階で博士前期課程が160名（交換留学生3名を含む）、後期課程が128名、総計300名近い院生が日々それぞれのテーマのもと研究活動に励んでいます。考えてみるとこれは大きな研究者集団です。だが従来、ここもご多聞に漏れず、院生の多くは、1専攻1専修の枠内に、さらには自身の狭い世界に安住し、他者との関係を積極的にもたない傾向がみられました。いわゆる学問のタコソボ化の縮図です。

しかし果たしてそれでよいだろうか。これだけの若くて（絶対年齢ではない）、多様な研究者が集う場である。それが相互に連携をとることなく個別分散状態のまま放置されることは大変な損失ではないか。個別の研究と周囲の異なる分野からの知的刺激とがミックスすれば、そこに新たな学問領域の創出と個別研究の底上げが可能になるのではないか。何よりも今日、人文科学の停滞が指摘されて久しいが、それを打破していくためにはこうした試みが求められている。そのような反省と前向きな話し合いの上に、私たちは「文化継承学」という新しいジャンルを意識した大学院の授業科目を設置しました。

文化継承学という名は、私たちの人文学という学問が、人類の過去の営為＝文化を研究し、それを後生につなげる役割を負っている、という自覚の上につけられました。当面ここに参加するのは、大学院博士後期課程在籍者と主体的に関係をもつ教員で、それに後期課程を修了した若手研究者も加え、いずれも研究者としては対等であるとの原則に立って、分野を越えた研究の報告と議論を積み重ねてきました。そして今年でちょうど4年が経過しました。本誌の号数がそれと一致します。おそらく今日の内外の人文科学系大学院で、このような授業科目をもち、多くの院生と教員と一緒に授業を進める形態は、非常に稀なことではないでしょうか。

この4年の歳月によって、何が目に見えるものとして結実したかと問われますと、正直具体的に説明するのは難しいのですが、私個人でいえば、毎回この授業で多くの新鮮な知的刺激を与えられています。何よりも従来ほとんど接触のなかった他の専攻専修の院生諸君と顔見知りになり、時に杯を交わす機会もできました。どこかよそよそしかった文学研究科全体の雰囲気も確実に変わってきたように実感されます。教員たちの間では、今後もこれを充実させ、一つの研究の柱に育てたいと話題にされています。

であれば、時間の経過とともに派生するマンネリ化とも向き合う必要があります。本誌4号の論文数が少なかったのも、それと無関係でないかもしれません。来年度は改めて初心にもどり、文化継承学の意義を問い直してみたいと思います。新たな学問分野を育てていくために皆様のご支援とご指導をお願い申し上げます。

（史学専攻アジア史専修 氣賀澤保規）